

令和7年2月22日(土)

種子島家墓地（御坊墓地）調査報告会説明資料

1. 種子島家の歴史

- ① 平清盛の孫行盛の子で北条時政の養子となった信基に始まるとされており、初代としている（伝承）
- ② 伝承としては、時政により多禰島・屋久島・口永良部島など12島をあたえられたとするが、当時の多禰島の地頭は大浦口氏で上妻氏が在島していた
- ③ 史料上確認できるのは観応2年（1351）、第5代時基からで、島津庄大隅方惣地頭の名越（北条）氏の代官（地頭代）の「肥後氏」が「種子島氏」
となる
- ④ 文和2年（1353）、時基の子6代時充（肥後左近将監）に対し、将軍足利義昭や九州探題の今川了俊からの文書に「多禰島殿」とありこれが「種子島」姓として登場した最初である。その後、南北朝時代に島名を「種子島」とし、それを名字とした
- ⑤ 南北朝期の文和5年（1356）3月、禰寝道種から「多禰島現和村」を押領した「肥後中務太郎」が5代時基に比定される。

⑥ 大隅国守護島津氏(奥州家)との関係は南北朝末以降の応永15年(1408)

10月8日、島津元久が「肥後左近将監入道」(8代清時)に「薩摩国内屋久・恵良部両島」を「料所」として与えている。

→ただ、種子島氏は、室町・戦国期に種子島の安堵を島津氏に求めたことはなく、島津分国内では、肝付氏や禰寝氏と同様の自立した「国衆」であった

2. 種子島忠時(12代)の上洛

① 応仁・文明の乱ころ細川氏と大内氏の対立に伴い、中国との遣明船寄港地として利用されるようになり、文明元年(1469)、種子島時氏(11代)の主導で支配下にあった種子・屋久・口永良部の三島が、一気に法華宗に改宗した。これは、同宗を庇護する細川氏や堺商人の要請があった

② 天文12年(1542)、13代恵時と子の時堯(14代)が親子で争ったが和睦し、島津貴久の介入もあり時堯が実権を握った

③ この混乱状況の中で、天文12年8月25日、倭寇の大船が西村浦に来航し、同乗していたポルトガル人二人から鉄炮を購入した

3. 種子島時堯の活動

① 鉄炮の国産化に成功した時堯は、天文10年に朝廷から「弾正忠」に任じられ、京都とのつながりを強くする。また鉄炮外交を進めていき、「左近

将監」に任じられる

- ② この関係を支えたのは法華宗であり、その拠点だった本能寺は焼失していたが、日承上人は、天文6年8月に種子島に下向し、翌々年まで滞在し、種子島に再建の費用支援をもとめている
- ③ 島津宗家の貴久は、無官位であったが、種子島氏に仲介を依頼し、天文21年（1552）、「従五位下修理大夫」に叙任されている
- ④ 種子島家は婚姻を含め島津氏との関係を深めることにより家臣化していった。

4. 松寿院の活動

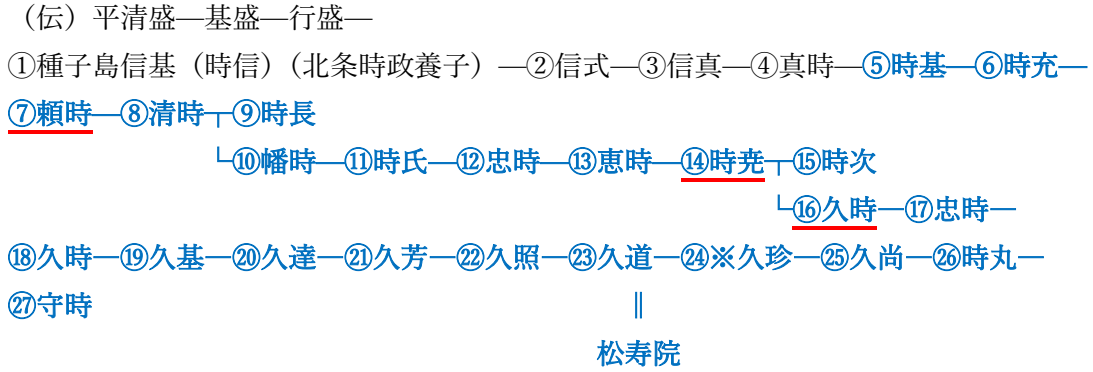
- ① 近世島津家9代当主齊宣の子として生まれ於隣と名付けられ、生前から種子島家22代久照の嫡子鶴袈裟（のちの久道）に輿入れが決められていた
- ② 文政12年（1829）、久道が亡くなり松寿院と名乗り、名跡として島を治める
- ③ 島津齊宣の12男の報七郎を養子として迎え24代種子島久珍とする
- ④ 久珍死去に伴い生まれたばかりの子の久尚が領主となる
- ⑤ 幼少の久尚を支え「三大事業（大浦川の改修、塩田開発、西之表港の防波堤整備）」を行う

⑥ 種子島家の「御坊墓地」「御拝塔墓地」の整備を行う

※松寿院については、村川元子著『松寿院 種子島の女殿様』（2014）を参考に
記した

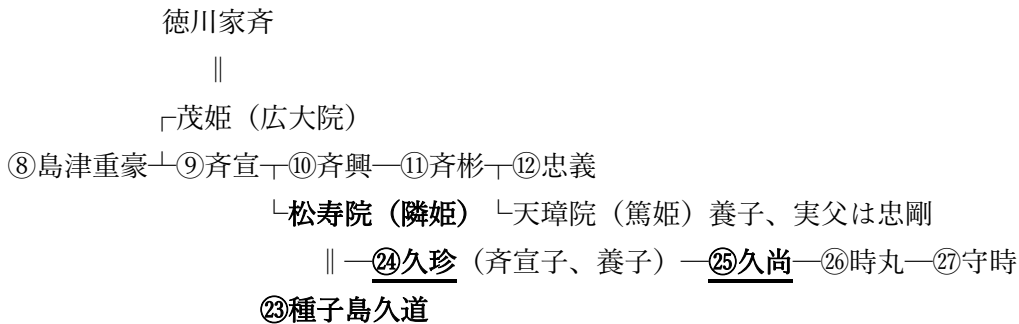
（作成：九州文化財研究所）

○種子島家系図

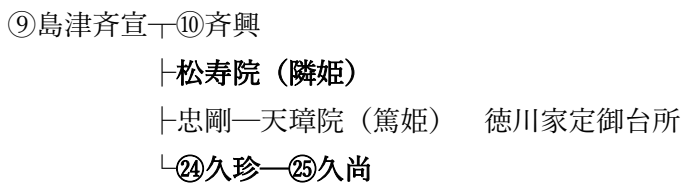


- ・青字は史料で確認できる人物
- ・下線部は御坊墓地の被葬者
- ・※養子

○松寿院関係系図



- ・下線部は松寿院が名跡を務めた



（作成：九州文化財研究所）